

無限の可能性のある女性研究者のたまごの背中を押してください



池本良子
論説委員
金沢大学 教授

女性活躍促進が注目される中、世界経済フォーラムによりジェンダー・ギャップ指数 (GGI) ⁽¹⁾2018 年度版が発表された。我が国の、ランキングは測定可能な 144 か国中 110 位 (スコアは 0.662) と、昨年度の 114 位から少しだけ順位を上げたとはいえ、G7 では相変わらず最下位と情けない状況である。学術分野での女性研究者の割合においても、15.7% (平成 29 年度) と先進 29 개국の中で最下位である ⁽²⁾。文部科学省では、女性研究者の増加と研究力の向上のために、大学内の環境整備、企業との連携、ネットワーク構築、海外派遣など、様々な事業への支援を行ってきた。各大学において、女性が働きやすい環境整備や男女共同参画に対する意識改革も進めており、女性を積極的に採用する仕組みを導入している大学も少なくない。その結果、大学における女性研究者の割合は、26.6%にまで増加したとはいえ、女子学生の割合 44.8%と比較すると、依然として低い状態である。なかでも、工学系の分野にあっては、女性研究者の割合は 10.6%にとどまっている。これは、学位をもつ女性研究者の人材不足が大きいと考えられる。工学系分野の女子学部学生の割合は 14.5%と低く、修士課程に進むとさらに 12.6%に減少する。中高生の段階から、理系選択をうながし、工学系分野に進学する女性を増やすことが無難であるが、息の長い取り組みであり、中高の教員の理解も必要である。大学においては、現在工学系で学んでいる女子学生の大学院進学、学位取得を進めることが、最も近道であろう。

筆者は 10 年ほど前から、大学において女性研究者支援の仕事をしている。毎年シンポジウムを開催し、様々な企業の女性リーダーを招き、その経験談を聞いてきた。多くの女性が、様々な場面で背中を押してくれた恩師や上司の話をする。私自身も、恩師に背中を押された一人である。ほんの少し背中を押されることにより、一歩を踏み出すことができる女性は多い。私の研究室では、博士課程の学生

6 名のうち、4 名は女性であるが、たくましく研究を継続している。一方で、女性活躍がうたわれる中で、女性が働き続けることに対する困難さが浮き彫りにされ、働きながらの結婚、出産に対して、不安を持つ女子学生が多いように感じる。研究に興味を示しているにもかかわらず、大学院進学に対して消極的な女子学生も多い。ぜひ、身近な女子学生に、仕事を継続する困難さではなく、研究のだいご味や、新しいものを生み出す感動、社会をささえていく喜びなどを、熱く語ってほしい。その背中をそっと押して、大学院進学を後押ししてほしい。

一方、企業における女性研究者の割合は、内閣府の統計データでは、わずか 9.2% (平成 29 年度) である ⁽²⁾。女性の研究開発分野への参画と学位取得も、女性の活躍促進に重要な要素の一つではないか。土木建設業界では、深刻な人材不足を抱え、女子学生の確保をその解決策の一つとしてとらえるようになってきた。ハード面、ソフト面ともに、女性でも働きやすい制度や環境を整え、女性技術者が確実に増加している。しかし、土木学会においては、正会員 34,684 人中女性会員は 1,420 名とわずか 4%である。年会等に参加する女性は増えてはいるものの、まだまだ、珍しい存在であることに変わりはない。企業においても、若い女性技術者の背中を押して、学会への参加を勧めてほしい。そして、できれば大学での学位取得の後押しをしてほしい。学会において活躍する女性や、大学で学ぶ社会人女子大学院生の姿を身近でみることは、女子学生の意識の向上につながる。学会や大学が、女性研究者の育成の好循環を生み出す場になることを期待したい。

女性の力を過度に期待することは、余計なプレッシャーを与えることにつながり、好きではない。女性だからとか、女性の視点といわれるのは、理系女子は好まない。しかし、背中を押されて一歩踏み出すことのできた女性はたくましい。期待に応えるために努力する。困難を乗り越える力がある。無限の可能性のある女性たちを後押ししてほしい。それが、この土木学会だけでなく、わが国の将来の発展に必ずつながることであると信じている。

(1) The Global Gender Gap Report 2018、World Economic Forum

(2) 男女共同参画白書 平成 30 年版、内閣部男女共同参画局